

名護屋城跡から峯岐を見る

る。事情はよくわからないが、秀吉が晩年老衰し、判断力を失ったことは事実であろう。我々のような凡人なら多少もうろくしてもひとから相手にされないだけのことでその影響は大したことではない。しかし秀吉ほどの英雄がもうろくするとその及ぼす影響甚だ甚大である。私は数回韓国を訪れているが文祿慶長の役の爪跡は非常に深く、韓国人は絶対にそれを忘れていない。私は本居宣長という人を非常に尊敬している。従来の日本の史家が日本書紀を中心とし、殆んど古事記を無視していたのに宣長は古事記の超重要性に着目し、30年の年月をかけて「古事記伝」を書いたのは日本の歴史の見方を一変した。本居宣長の名は日本の歴史の続く限り忘れられないであろう。然るに誠に残念なことには彼の「ぼつかいがいげん駁戒概言」という本の下の巻下の前半に秀吉の征韓の経緯を評述し、秀吉を非常に賞揚している。私は他の点について本居宣長を尊敬しているのであるが、さればこそ一層彼の征韓に対する態度を悲しく思うのである。しかし文祿慶長の役は既成事実として歴史にくり入れられている。我々はそれを抹殺することはできない。我々としてできることは文祿慶長の役に発揮された破壊のエネルギーを日韓親善促進という建設へのエネルギーに転換することである。そして私は日韓トンネルの建設こそ正に我々に課せられた罪の贖いであると思う。

空想から科学へ

近畿大学学長 景山 哲夫

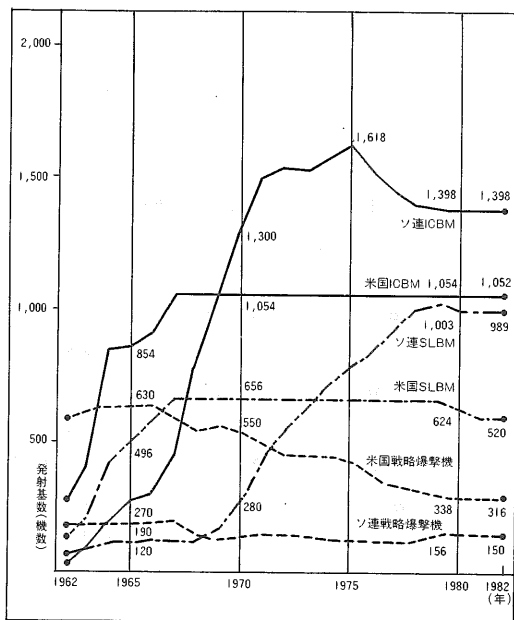
「空想から科学へ」という言葉がある。何年前までは「空想」の分野と「科学」の分野とが正確に一科学的に一識別できた。だが、今日のように、科学技術が急速に発達すると、どこまでが空想で、どこからが科学であるのか、区別することが難かしくなってきた。人間の能力が次第に神の能力に迫ってきた。人間は古くから、鳥のように自由に空を飛び回りたくて空想していた。人間は今、空想ではなく、地球の空どころか、宇宙を駆け巡っている。無重力の天体で食事をとり、排泄を行っているのだが、無重力の天体では排泄物はどこに溜るのだろうか。大変な空想を必要とする。第一、無重力の世界では「溜る」という言葉は不適當だろう。

最近、さかんに人造臓器が開発されている。人間の肉体、内臓・骨格を造るのは神の行為であった。人間は神の領域を犯し始めている。それどころではない。今日では遺伝子工学、バイオテクノロジーの発達によって、神さまも行ったことのない遺伝子の組み換えを始めている。生命現象の本体、DNAの解明と利用を目的としている。

人間が存在する限り、その知識、科学技術の発展は無限である。問題が提起されれば、その解決は時間の問題に過ぎないと、今日の人間は信じている。ところで今日、全世界の人達が解決を待望している最大の問題は何か。いうまでもなく、それは世界平和の実現と核戦争の回避である。

今年もまた、八月が近くなった。核兵器廃絶を目ざす原水爆禁止大会が、広島、長崎などで大集会が決行されるであろう。反核、反戦の世界的草の根運動は大挙してアメリカまでも出かけるのかも知れない。この運動は当然、モスクワに向っても進行すべきだろう。ソ連は世界最大の核兵器保有国だからである。ソ連も核兵器が地球をふっ潰ばす恐るべき兵器であることを熟知している。「だから」—というのは理解し難いが—ソ連はヨーロッパにSS20を仕掛けており、それに対抗してアメリカはNATOに巡航ミサイル、パーシング

IIなどを配備する予定である。風雲はヨーロッパを中心によいよ急である。私は本論の冒頭で「問題が与えられれば、その解決は時間の問題だ」と述べたが、そうではないではないかとの反問も出すはずである。一個の核で地球が何十個も破壊する核兵器が百数十個も存在する。その製作費は想像を絶する巨費を要する。しかも、一しかもですよ—その兵器は絶対に使用することが許されない無用の長物である。これほどの愚行が今日の文明世界に公然と存在するのである。正常な論理を追って発言している筆者の前提が崩れるのは当然と言えよう。ソ連と雖も今日、核戦争を待望してはいないと信ずる。(この点はもう少し詳論すべきだが、ここでは省略する。)



(注) 資料は、ミタリヤー・バランス(1982-83)等による。

米ソ戦略核戦力の推移

今日、国際社会では人は国家を中心に行動している。国家にはコンセンサスをもつ法律があるので、それに規制されて自己の利益を勝手に追求することは許されない。ところが、国家の行動を規制するアグリーメントも機関もない。そこで無課な国家は国益を主眼に勝手に行動する危険がある。それが原因で国際間に敵意や闘争が起るし、飢餓、紛争、戦争に悩まされる。国連には権力が

ないのでその調停には限界がある。第三諸国の発言も影響力を持って来たが、国際問題は基本的には強国の影響下にある。国境を越えた理性と愛を前提とした平和な、幸福な社会は未だ存在しない。

前置が大変長くなってしまったが、これから本論にはいる。筆者は7月中旬、「日韓トンネルプロジェクト」の研究第1部会員として、九州から対馬の査察の旅に出た。この地域は、かつてわが国が韓国を通じて、先進文化を永い間、輸入していたルートであり、表玄関であった。地図を見ると米粒ほどにみえるが、対馬は大きな島で、車で南部の厳原を朝の8時半に出発して、途中若干の見物をし、昼食もとったが、北端の比田勝—ここは天気の良い日は前面一帯に韓国が見える—に着いた時は既に夕景であった。対馬で異様に感ぜられた風景の一つは、高い山が非常に多く、その頂上に高い櫓が立ち、それが北から南に続いていることであった。これは昔、電信や電話のなかった時代は、烽火を焚いて、その煙によって有事を九州本土に知らせていた。この烽火台が北から南に延々と続いている。島の人達はこの烽火を見て、祖先の時代を慕い、歴史を追憶してきた。対馬は九州よりも韓国に遙かに近いので以前は買物にも韓国に出かけていたし、島にも多数の韓国人が生活しており、常に必ずしも同じ部落に暮していたり同じ部落に住居していたわけではないが、同じ地域に住んでおれば、地縁社会が形成され、相互に睦まじくなっている。日韓トンネル、あるいはアジア、ハイウェイ建設の意義は実はここにあるのである。日本と韓国とが一つのトンネル、あるいは鉄橋で連結されれば、その地域は一体化され、連体感、共同体感が自然に湧き起こってくる。それが国際会議を通してのアプローチの場合は、政治、経済、思想、宗教、人種などの論理が先行して、どうも協調が困難である。発想を転換して、理論からでなく、実践を通じてのアプローチの方が成果が高いようである。これが文鮮明師のハイウェイ建設の意義であり、そこから新しい世界の平和が具現化されるのである。